

第 部門 宿泊滞在の促進をめざした奈良県観光システム整備構想に関する研究

立命館大学 理工学部 正会員 春名 攻
立命館大学 大学院 学生員 玉川 準一朗
立命館大学 大学院 学生員 ○萩原 嵩

1. 本研究のねらい

地域観光振興は、観光目的の来訪者による各種の消費行動に対する物産販売・宿泊サービスも含む観光サービスの提供などに関わる観光産業の幅広い雇用の創出などの点から大いに着目されている。また、歴史的施設を始め既存の地域資源・施設の観光対象としての有効活用が、日常生活の中の地域住民利用との共存が可能であるというメリットもあるので、近年、観光振興による地域活性化が注目されつつある。地方都市においては一般的に観光事業者の高齢化が進んでおり、近年の開発資金の逼迫という状況を考えると、新たな地域観光振興は大きな困難と課題を抱えているといえよう。

本研究の対象地である奈良県は、県北部を中心に大阪都市圏のベッドタウン化が進行しており、現在奈良県独自の産業発展の推進と地域内雇用促進のための効果的な施策が重要となっている。観光の現況においては、奈良県は年間約 3,500 万人の観光客が県全土で広く分散的に訪問している。県の有する観光資源においては、歴史・文化的資源を中心に世界を代表する観光資源が存在しているなど、恵まれた環境にある。交通条件は、鉄道路線の整備及び、近年の高速道路整備により他府県からの広域アクセス性が優れつつある。また、京奈和自動車道開通と幹線道路整備により、県内移動についても向上する見通しがある。問題点としては、観光地が県全土に分散していること、宿泊観光客の割合が大変少ないことがあげられ、宿泊施設整備量は全国最低レベルとなっている。モビリティの進展により、近年の観光行動に見合う宿泊基盤が不足していること、移動・回遊基盤の脆弱によって、せっかくの観光資源が活かしきれていない状況にあるといえよう。奈良県の宿泊観光客は日帰り客の約 8 倍の金額を費やすことから、宿泊基盤整備を行うことで、奈良県観光が活性化されることが考えられる。本研究では、奈良県の今後の発展を目指した観光振興施策として、観光

客の県内宿泊を推進させるための方策について提案・検討を行う。

2. 都市・地域構造面からの京都観光との比較

本研究では観光客の訪問行動を観光行動計画要因関連から階層的に表現(観光行動WBSを作成)し、奈良県観光の現況分析と意向分析を行った。観光客は、宿泊を伴う観光旅行を行う際、個々の時間的制約、費用的制約の下で観光関連情報・観光資源への魅力・観光客の特性・交通環境・宿泊環境から観光行動を決定し、続いて観光地内での行動計画を立てると考えた。観光行動WBSの表現図については省略し、発表時に提示し説明する。

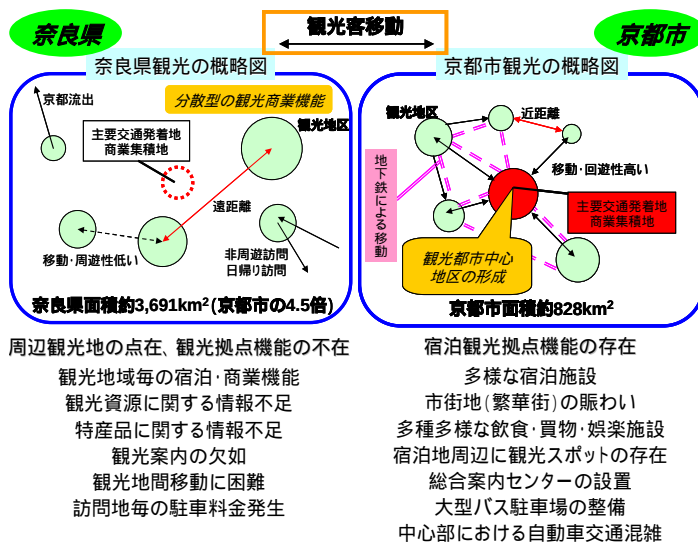


図-1 奈良県と京都市における観光システム比較

京都観光との比較分析から、奈良県での滞在型観光を促進するためには、豊富に存在する観光資源を有効に活用し、県の地域特性を考慮した上での宿泊地整備について検討する必要があると考えた。奈良県観光の回遊行動を図-1の観点から考察すると、以下のように集約することができる。奈良県は観光拠点機能がなく、ニーズに対応できる宿泊地がないことや、観光地間の移動が困難であることから、訪

Mamoru HARUNA, Junichiro TAMAGAWA and TAKASHI Hagihara

キーワード; 観光行動WBS 宿泊拠点

連絡先; 滋賀県草津市野路東1-1-1 立命館大学 都市・地域計画研究室

問客の日帰り行動と非周遊行動が中心となっている。従って、宿泊訪問客数を増加させるためには、豊富に存在する観光資源を有効に活用するとともに、宿泊基盤の整備をはじめ魅力的な観光ツアーシステム、等々、多様な観光ニーズに対応できる観光地整備を提案・実行していくことが重要であると判断した。

3. 大和郡山市における宿泊拠点の提案

本研究で提案する宿泊拠点は、地区内及び周辺に観光資源を有し、アクセス性が良好である地区が対象地区となる。従って、好条件の地区として、奈良県内の地方都市である「大和郡山市」において、上記に示した宿泊拠点について構想を立案する。大和郡山市は、当市におけるベッドタウン化と中心部商業の衰退が問題視されており、地域内雇用の創出と中心部の生活基盤の再整備が急務となっている。当市中心部においては、郡山城跡及び城下町としての雰囲気を感じさせる各歴史資源の密集、近鉄・JR両駅の整備と高速 IC に近いといった良好なアクセス環境を持っている。また、当市は空間地理的に「奈良県北部に存在する二つの世界遺産」の中間に位置していることから、当該地域において奈良県観光の宿泊街として産業振興を行うことで、奈良県における滞在型観光の推進できると考えた。また、当市における効果的・効率的な地域再生を目指す手段としても有効であると考えた。



図-2 宿泊拠点構想案

整備構想案については図-2に示すような当市中心地区内整備とフリッジパーキングシステム及び観光バスツアーシステムを提案する。道路幅が狭く、1km四方のコンパクトな当該地区において、自動車交通を遮断し、許可車両及び中量輸送交通（地区内巡回バス）を通すことで、宿泊滞在時の歩行回遊環境を安全で快適なものにする。また、駐車場を地区の周囲に設けることで、自動車での拠点へのアクセス性を保ち、拠点発着のバスツアーと併用することにより、奈良県観光の周遊性向上が期待できる。

地区内整備においては、既存商店街の活用・転用及び外観を調整することで、歴史的雰囲気をもつ、多様な観光商業施設を整備することが可能となる。このような地区内整備と観光交通システムを施すことで、少ない財源で観光訪問者の増加、宿泊滞在の推進、周遊観光の促進及び交通機関や施設利用の増加による地域の活性化が期待できる。

4. 観光客の意見調査による宿泊拠点構想の評価

上記の提案内容を、奈良県を訪問する観光客に対し、アンケート調査を用いて具体的な評価をしてもらった。ここでは、得られた評価値を用いて県内での滞在日数が増加する確率を算出した。観光客の属性によって観光ニーズが異なることから、詳細な分析と評価を行うために、年齢・移動手段・同伴者形態による観光客属性のグループ別けを行った。グループ毎の主成分分析を行い、奈良県観光に対する意向を特性値として抽出した。また、抽出した特性値を用いてクラスター分析を行い、特性値が等質なグループ同士を3タイプに分類した。次に、それぞれのタイプにて宿泊地の環境に対する考慮の度合をAHP（階層化意思決定法）補正を施した後、宿泊拠点の総合評価値として算出した。また、これにロジスティック回帰分析を行い、評価値と滞在日数増加確率の関連性を分析し、各タイプでの平均評価値から、平均滞在日数増加確率を求めた。この結果、16.86%の観光客が滞在日数を増加させるという結果が得られ、観光客が本提案を評価していることが理解できた。今後、さらに詳細な分析を行うことが研究課題であると判断している。